

令和元年5月16日現在

機関番号：32408

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02792

研究課題名(和文) 大学と大学院の連携による教員養成モデル：教師教育者、教員、学生の発達を目指して

研究課題名(英文) Construction of a teacher professional development model: Development opportunities for teacher trainer, in-service teachers, and pre-service teachers

研究代表者

渡辺 敦子 (Watanabe, Atsuko)

文教大学・文学部・准教授

研究者番号：70296797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では教師教育者、英語教員、教員養成段階の大学院生の三者が振り返りによる成長することを目的とした。面談、ジャーナル、ディスカッション等の質的データ分析後明らかになったのは三者にとって振り返りの実践が困難であり、教師教育者、教員はデータ分析に数年をかけ、ようやく研究当初の自己の体験をメタ認知的に見ることができた。振り返りとは自然発生的に起きるものではなく、面談時における質問を多様化する、参加者が自分の質的データを読む、様々な振り返りのアクティビティーを導入する、Thinking at the Edge(TAE)等のストラテジー導入等足場掛けとなるサポートが必要であることを提言する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は振り返りについて4年間という長期にわたり研究者、研究参加者が話し合いをしたことである。長期の参加によりその時々による個々の成長が見られ、教師の成長とはそのキャリアを通しての連続体であることの提示である。また研究者間の分析に数年の時間を費やしデータ分析、論文執筆も振り返りの場となることへの認識だ。データ分析は個人による振り返り、また研究者間の話し合いによる振り返りから成り、分析方法もテーマ抽出、包括的な意味を考えるフレーム等からの振り返りもあった。さらに論文を書き上げていく過程も振り返りの場となることを提言した。また本研究では振り返りを促すための具体的な方策をも提案している。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed at creating a framework for a collaborative professional development opportunity for teacher trainers, in-service teachers, and pre-service teachers. For professional development, the three parties engaged in mutual class observations, on-line journal writing, and interviews to discuss the observation and their ideas about teaching. The three research methods were reflective forums as well as the data source. One unique aspect of the study was to gain multifaceted perspectives through discussion with others who have different perspectives of teaching. The analysis of the data showed that facilitating reflection was not an easy endeavor which was the case not only for the graduate students but also for the teacher trainer and the in-service teachers. It was also difficult for the three parties to gain multifaceted perspectives. The study concludes that scaffolding is necessary for enhancement of reflection.

研究分野：教師教育

キーワード：振り返り リフレクション 質的研究 教師の成長 質的データ ジャーナル フォーカスグループ デ  
 イスカッション インタビュー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

本研究は大学院の英語教育法を履修している学生が授業の課題として学部の英語の授業の観察し、授業後に大学院生と教員が授業について話をするということから始まった。学部の英語教師は事前にレッスンプランを大学院生に渡し、授業の目的等を説明した。話し合いの初めころは学生に感想を述べてもらうだけであったが、回を重ねることに学生の質問が教師が自分の授業について考える振り返りとなり、また自己の授業の過去、現在、未来を通して考える機会になることに気がついた。面談の場は大学院生のみならず教師の学びの場でもあった。この二者の面談から本研究は始動した。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は某大学の学部共通英語教育プログラムと大学院の英語教育法コースの連携による教員養成のモデル構築である。本モデルは1. 教師教育者(Teacher Trainer: TT)、英語教員(In-service Teacher: IT)、教員養成段階の学生(Pre-service Teacher: PT)の三者の成長、2. 省察(振り返り、リフレクション)による教員養成、3. 複眼的視点の涵養からの発達を狙った。

#### 3. 研究の方法

本研究は質的アプローチを採り、面談とジャーナルから省察の促進を行い、三者の発達過程を質的に分析した。研究を開始した年度の秋学期に TT の大学院の授業を履修していた大学院生(PT)の中から研究参加者を募った。TT、PT と大学学部共通英語教育プログラムを教えていた教師(IT)の三者が一つのチームとなり、一学期にわたり次の活動に従事し、省察を促すことを目指した。1. PST は TT の大学院の授業に週 1 回参加する、2. IST は TT の大学院の授業を不參與観察する。3. PST は IST の大学の英語の授業を週 1 回參與観察をする。4. PST と IST は授業後、面談を通して授業について話し合う。5. 三者により共有されたオンラインジャーナルに PST は記述をする。6. TT と IST はジャーナルの記述にコメントをし、自身もジャーナルへの記述をする。

分析方法としては上記 4 の音声データは書きお越しされ、5,6 のジャーナルデータと共に、コーディングにより分析された。分析は TT と IST 二者間で数年間にわかっておこなわれ、様々な段階を経た。第 1 過程は TT、IST が先ず個々にデータを分析し、それを二者間で話し合った。第 2 過程では二者間での話し合いの中からテーマ抽出を試みた。第 3 過程は抽出されたテーマをより包括的にくくるフレームを見出した。分析過程は一般的にはここまでになるであろうが、本研究においては 1 - 3 の過程から抽出されたテーマ、フレームをもって論文執筆を共同執筆する際の話し合いを通して再度フレームを吟味した。

#### 4. 研究成果

データ分析後、次の点が明らかになった。1. 学生にとって振り返りが困難であるということ。特に自分の言動をメタ認知的に見ることが困難であるということである。具体的には參與観察の授業で学部の学生、また IST の学生への対応に批判的な見解を示しても、自分の授業では同じことをしていること、自分が理想としている実践ではなく自分が授業で学んできた方法で教えているということに気がついていないようであった。2. 研究者である TT、IST にとっても振り返りは困難なものであるということ。TT、IST は研究実施後、数年を経てメタ認知的視点を持たずに研究の現象を眺めていたことに気が付いた。さらに大学院生を省察への導く方法をあまりわからずに研究に従事していたことにも気がついた。さらに複眼的視点を持つ事ができずに研究に従事していることもわかった。TT、IST は PST が参加した授業から表層的なこと(遅刻している学生、寝ている学生、英語の授業なのに日本語で話している学生が気になる)について振り返っていることにもどかしさを感じていた。しかしそれはどのような意味合いがあるのか考えることをしなかった。TT、IST は PST の振り返りを現時点の自分たちの視点から見ており、経験の少ない PST の視点から彼らの振り返りを考えることはできなかった。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

「大学と大学院の協働による教員養成モデル：教師教育者、教員、学生の発達を目指して」  
大学英語教育学会(JACET)言語教師認知研究会 研究収録 2018

〔学会発表〕(計 6 件)

「大学と大学院の協働による教員養成モデル：教師教育者、教員、学生の発達を目指して」  
大学英語教育学会(JACET)言語教師認知研究会 2017年3月4日(土) 東洋英和女学院大学  
六本木キャンパス

“Reflective practice: Making meaning of one’s experience”  
ELT Teacher Journeys. 2017年6月11日

「振り返りのサイクルにおける「叙述」の重要性」  
2018年6月17日（土）言語文化研究会 東京医科歯科大学

“What does it mean to reflect?” 第4回国学院大学FDワークショップ  
2018年2月22日

“What does it mean to reflect on your teaching?” Professional Development for  
English Teachers: Tohoku University. 東北大学高度教養教育・学生支援機構FDセミナー  
2018年3月24日

“Introducing reflection to your students” ExcitELT 2018年5月6日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：岩田祐子

ローマ字氏名：IWATA, YUKO

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：50147154

研究分担者氏名：宮原万寿子

ローマ字氏名：MIYAHARA, MASUKO

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：講師

研究者番号(8桁): 00453556

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。